

# 水槽の女

いしばきん

お互いを侵食し合っていた。この時間には終りがくる。俺は眠りのなかで壊死するより、自分の舌を噛んで正気に戻るしかないのか。俺だけが時を刻む。

俺は恥ずべき幻想を広げて水槽の女と共に感し合っていた。あの女は癒されているのだろうか。共感するものは癒しになるのだろうか。俺には分からない。その時、近くでいきなりめざまし時計が鳴りはじめた。俺は弾かれたように首を左に右に振り回し、音の方角を求めた。携帯用のめざまし時計がベッド横の窓枠の上に置いてある。

が、それを見つけた時にはもう途子の腕がアタマのボタンに伸びていて音が切れた。

窓ガラスは二人の体温のせいかやわらかく曇っていた。俺は煙草をくわえたまま、人差し指の腹でガラスを拭う。ガラス窓の向こうはみぞれが降っている。

「あの熱帯魚を捨てて欲しい。ほら、あの水槽の中にいる奴だよ」

俺は途子と会うたびにそんな言葉を口にするようになっていた。しかし彼女は俺のそのひと言がはじまると、たちまち他人めいた顔になって笑った。

幼い頃の思い出が吹き出した俺自身にも責任があるのだ。俺がそれを言うのと途子はほっと肩を落した。

俺はまた巨大な熱帯魚のいる水槽を指差して、「耐えられないんだ」と言った。彼女はなぜか無言のままだった。そのとき俺を捉えていたのは、あの水槽の女から逃れるためにも今夜のことをきっかけに自分の日常の時間が少し変わってゆくのではないかという、ひりひりするような期待だった。

俺はその後しばらく途子を避けていた。彼女もまたそれを当り前と受け流しているうちに、俺の方がどうやら何かを見極めたらしかった。

半年ごとの昆虫学会の準備で徹夜が続いた最後の夜、先に帰ったはずの途子がふらりと戻って来た。そして帰り仕度をしている俺をねぎらう口調で夕食に誘ったことから、二人のあいだが再燃した。

もともと最初の結ばれ方は泥酔していて、出会いがしらの交通事故のようなものだったから、二度目のその夜が本当の意味のはじまりだったかもしれない。

「実は今日が誕生日なの」

途子は少しはにかみながら言う。

「そう……。俺はあなたの、四つ年下だ」

「民間で働いていたから、年をくつてるの。今年で二十六歳」

途子は目元にかすかな微笑を浮かべて言った。

俺はそれを聞くと「もっとずっと若いと思っていた」と言う。

彼女は縁無ししの度のきつい眼鏡をかけ、唇には服の色に合わせた紅を濃くつけていた。途子は複雑に揺れる表情を見せた。

「二十五歳までに結婚……。一度するはずだった」

とだけ途子は答えて自分からその話を打切った。

俺はふとまた子供の頃に出会った昆虫好きの少女のことを思い出していた。

もの心つく頃から母親を知らずに育った俺は、その穴埋めのようにいろんな虫を捕えてきては隠れ飼っていた。生きもの嫌いの父に見つかればたちまち捨てられてしまうため、机の引出しから筆入れやチョコレート的小箱など隠し場所に知恵をしぼっていた。だが、たいてい何種類もそろわな

「だって、あんな大きなもの、どこに捨てればいいの？ ずっと昔からこの家にいるのよ」

「でも、あれを見てみると気が休まらないんだ……」

俺は言い返しながら、水槽の女の記憶が俺の体へ少しずつ潜り込み、内臓の中でうごめいているのを感じていた。

だが、今の俺は途子との暮らしに不自由をしているわけでもなかったし、見栄を張らねばならない世間づきあいがあるわけでもなかった。ただ考えてみると、それはかれこれ半年になる途子とのかかわりの中で、じわじわ育ってきた妙な違和感のように思われた。

俺が途子のマンションに転がり込んだのは半年前、サークルの新生歓迎会のときだった。留年二年目の俺は昆虫研究会の部長で、彼女は新メンバーの友人だった。妙に落ち着いた雰囲気があった。それが二次会、三次会と進んで気がついたときには彼女のマンションで、二人ながら肩の寒さに目を覚ましていた。彼女の名前は永井途子、二十六歳。医学部の大学院修士をこの四月で休学したという。

汗の匂がしみこんだ蒲団に向き合うと、蒼ざめて言葉もない彼女をむしる気の毒に思った。こんなことになったのは酒のせいだけとは言えない。

いうちに見つけられてしまった。たとえそうならなくても狭いところに閉じ込められた虫たちは、おそらく寿命の半分もまっとうしないうちに次々と死んでしまった。

しかし死んだ虫たちも俺は好きだった。肢を縮めてコチコチになったテントウ虫やコガネ虫などには、生きてるときより死の硬質な美しさを感じられた。

夜になると、いつも電灯の光の下にそれらを並べていた。四方から角度を変えて眺めると、虫たちはヒスイのように輝いてこの世のものとは思えない陶酔へと俺を引き込んだ。

そんな虫の美しさを俺に教えたのが、近所に住む四歳年上の色白で背の高い少女だった。裕福な家庭に育ったその少女は立派な標本箱をいくつも持っていた。蝶一色の箱から蝉やクワガタ虫などを混ぜ合わせたものまで沢山持っていた。そのほとんどが自分で採集したというその少女に、俺は心から尊敬を抱いていた。

「俺にもできるかな」と聞くと、少女は「できるわよ」と色白の頬を赤く染めて答えた。えくぼが浮かんだ。

それから少女は毒針で悶死させたばかりのトノサマバッタの腹に、薄刃のナイフを当てながら教えた。

「みてみて。こういうバッタとかカマキリなんかは肉食だからね、こうして腸を出してやらないと、お腹が腐って切れてしまうんだよ」

少女のナイフの動きにつれて、バッタの腹から灰白い花芯のようなものが溢れ出して来た。

「わあ、きれいだ」

俺は本当に感動した。

「文人くん、知っている？ 昆虫と虫とは似ているけどちがうんだよ。蜘蛛とかカツムリなんかは昆虫じゃないのよ」

俺の感動の聲に煽られたように、少女はそんなことも教えてくれた。案外似そうにえくぼを浮かべて話した。

ある日の帰り際に、その少女から一匹のカメ虫をもらい受けた。名前の通り亀に似た昆虫だった。緑色の背中に描かれた赤い線の模様も亀の甲に似ていた。

光にかざすと、それは体のまわりに虹色のスペクトルを放った。それが少女にとってどれほど大切なものか聞かなくても俺には分かった。

腹を撫でる俺の耳元に、彼女はそれを繰り返した。この部屋からはゴォーという列車の音が聞こえる。途子が俺の腕の中にいる時も、その音が間断なく俺の思いを引っぱる羽目になった。

「俺、大事にする。……一生大事にする」

途子の寝室に入ると、俺は奇妙なものに監視されているような気がしていた。彼女の寝室の隅にあるテレビ台の上に一メートル四方もある巨大な水槽があった。その中に白銀色の巨大な熱帯魚がいた。六十センチ近くもあるその巨大な魚は水槽の中で停止しているようである。ただ水槽の水が循環式の酸素の泡と共に揺れている。その名前も知らない巨大な魚は呼吸もしていないように見えたが、かすかに口元から泡が出ていた。

しかし、その後あのカメラ虫はどうなったのだろうか。今になって思えば全く記憶がない。俺が小学校を終える前に、少女は札幌へ引越してしまっただ。やがて俺も成長するにつれて虫集めから遠のいてしまったが、当時を思い浮かべると、過去のどの時間よりも俺は胸の疼く懐かしさかられた。

俺と途子は行為が終わった後、いつも部屋を明りを消し、ベッドの上から裸のまま、青白い光の中でじっとその水槽の魚を見つめていた。そのとき俺の途子に対する気持ちと手元を離れていくようだった。俺の中にはあの水槽の女が溢れ出てくる。

途子と最初に会ったとき、話しながら浮かべるえくぼが俺をひきつけた。あの子の少女のような気がした。どんなに懐かしく嬉しかったことか。俺はそんな思いを心の端に走らせながら彼女を抱き寄せた。

すると、部屋の中に白い空虚が立ちあらわれるのである。俺はそれが自分の内から出ていること、自分の満たされない思いの部分であるらしいことを認めざるを得なかった。

その夜から月に一度か二度、俺は途子と隠れて会うようになった。学部が違っていても、俺はゼミの学生に見つかからないように大学からほど遠い場末の町で落ち合った。そして夕食を取ったあと、暗い路地裏のひっそりとしたネオンを灯すホテルの門をくぐるのであった。

だが、ではどうしてそれを埋めるかとなると、俺自身途方にくれるばかりだった。

後に途子はもともと愛と呼べるほどの昂りがあって俺と結ばれたのではない、と言っていた。半年後彼女は高校の時間講師の職に就いた。それで俺はまた以前のように、彼女との間に不自然な距離を置く必要はなくなった。

俺の二十二年の人生のうちで、そのときほど時間的に余裕を感じたことはなかった。一年前の秋、自由に何にでも使える時間が、光のように俺のまわりに漂っていた。眠りにつく時に消えてしまうけれど、目を覚ませば昨日と同じ光が窓から差し込んでいるように俺の時間も同じ色で甦っている。これも学生ならではの特権なのだろうが、休学してから時間を意識するようになり、この感覚は初めてだった。俺はやっと北大教育学部に入學したのに、留年を続けてその秋から休学することにした。俺の前にゆったりした時間が秋のふい陽光を浴びて澱んでいた。

それではと考えた挙句なのか、途子は頻繁に自分のマンションへ俺を誘った。彼女のマンションには今は誰も住んでいなかった。小学校の教師だった母親は脳溢血で倒れ、今は有料の介護施設に入っているという。

しかし自分の意志で約束したのにもう後悔がはじまっている。こんな時に考え過ぎる性癖が弱点になってしまう。

かつては人目の乏しい場末のラブホテルを選び、それも二度以上は同じところを利用しなかったほど、彼女は用心深い女だった。が、不本意な高校教師に決まったせいとか、彼女は突然開き直った。そして大胆にも自分のマンションに俺を招き入れるようになった。それからは俺も自分のアパートにはあまり戻らなくなった。

父の高校の後輩で、医学部の佐々教授の言葉にこだわり、あれこれと考

「ここなら勤め先の高校まで歩いて行ける距離だから、うっかり寝込んでしまってもいいよ。朝までゆっくりしててね」

父の高校の後輩で、医学部の佐々教授の言葉にこだわり、あれこれと考

それ以来、彼女のマンションに泊まる夜、決まって彼女の滑らかな白い

父の高校の後輩で、医学部の佐々教授の言葉にこだわり、あれこれと考

電話で、佐々教授は学会を主催中だから人手が足りなく手伝ってほしい、結構高額なアルバイトになるから、と強く勧めて、俺から生返事を吐き出させたあと弁解するように付け加えた。

ほとんど暮れた夜の闇の中に、古風な医学部の建物が、横たわっている。二階建ての屋根に尖塔のようなものが乗り、空に向けた鋭い切っ先が中世の教会を連想させる。夜のせいか陰気臭く感じられ、入るのがためらわれた。だが、そう言いながらもじきに慣れ、違和感を持たなくなるのかもしれない。

「お父さんの直接の紹介なんだから、しっかりね。アルバイトとしては徹夜になって大変だが、破格の時給だと思ふよ。なにせ交通費は別途で、時給二千円だから……」

俺は建物の真中がアーチ型にくりぬかれた入口に入る。右手に守衛室の覗き窓があり、通行人を監視している。何か声をかけられるかと期待したが、明りが漏れてくる以外に何事もなかった。俺は通過してすぐに右に曲がり、角の磨り減った木の階段を二、三段昇った。節目の残った廊下の床板の凹凸が運動靴の足裏にはっきりと感じられる。『実験準備室』と書かれた扉に辿り着いたが、俺はその前に立ち竦んだ。

どんな仕事なのかと聞き返した俺に、単純なことだから来れば分かるかと彼は説明を避け、午後七時までに来られるかどうかだけ聞きたがった。

すると、扉が急に中から引かれた。

観念的になりがちな今の悩みに変化をつけるのも悪くないと考え、生まれて初めてアルバイトをすることにした。しかも若干、医学部にもあことがれて初めてアルバイトをすることにした。しかも若干、医学部にもあことが揚した気分になることで、途子との同棲のことを忘れかけていた。

すると、扉が急に中から引かれた。

だが、しばらくする内に軽率すぎたかもしれないという不安が強くなった。佐々教授の所属しているのは法病理学教室。仕事の場所は解剖実習準備室で、徹夜になること。そして高額なアルバイト料。これらを結びつけて考えてみると、仕事がかか胡散臭い、得体の知れない無気味なもののように思われた。電話では説明せず、強引に約束させようとした彼の熱意も、暗い輪郭を浮かせながらせるものに感じられた。

すると、扉が急に中から引かれた。

よりによってそんなものに自分の貴重な時間を浪費する必要はない。いわゆる金は欲しいが、緊急に金にも物にも不自由を感じていないし、自由を持って余したり退屈で仕方がないというわけでもない。今はただ自分自身の時間の意味を、深く知り得ていないことにこだわっているだけなのだ。

すると、扉が急に中から引かれた。

しかし約束は約束だった。一度交わした契約を一方的に反古にすることはできない。すでに夕闇が下の街から始まり、今日が閉じかけている。俺の部屋はもう明りを浅くしている。

すると、扉が急に中から引かれた。

俺は立ち上がってスイッチを入れた。二個の白熱灯が黄色味を帯びた光を放つ。闇と共に無限に広くなりかけた部屋が、再び十畳の洋間に戻る。カーテンを引き、俺はぼんやりとそれを眺める。

すると、扉が急に中から引かれた。

俺はもう一度心を励まし、真新しい白衣をシヨルター・バッグに入れ大

すると、扉が急に中から引かれた。

学に向かった。

すると、扉が急に中から引かれた。

「——この間、東京での学会の時、きみのお父さんにご馳走になった。今度自然保護運動なんかに参加されたそうじゃないか。『世界遺産推進協議会』の会長になられたんだってね。お年なのにファイトがある。いつまでも気が若いのには感心するよ。その点、教育学を専攻の君のこと、とても心配しているようだったよ」

突然、佐々教授の姿が沈んだように見えた。階段を降り始めたのだ。建物の底の方へ、俺を連れて行くつもりなのだ。床が木からコンクリート石になった。空気がだんだん重く冷たくなる。

俺の足も重くなり、遅れがちになった。周囲の壁が押し寄せ、彼との間に湿気と闇を吐き出している。けれど彼を見失うのは困る。また足を早めた。降り切った佐々教授が、裸電球の下で俺を振り返っている。俺は急いで底に辿り着く。地下室の臭い、どんなに厚い壁をも透してくる地底の臭い、コンクリートと水とカビの臭いが俺を迎えた。俺の目の前には『組織室』と書かれた扉があった。

俺の影で黒く縁取りされた扉の前に立った佐々教授はノックをした。返事がない。彼はかまわず開ける。眩しい。強い風のように光が押し寄せ、俺を立ち止まらせる。俺は風上に向かって身を屈め、顔を手で覆って中に入った。ほとんど何も見えない。

しばらく佇み、少しずつ腕を下ろすと、三十畳くらいありそうな白い空間があり、地下にいることをふと忘れそうになる。しかし窓らしいものはない。そのかわり白衣を着た二人の若い男の向うに、飛びぬけて大きい水槽が見える。幅は三メートル、高さも二メートルはありそうだ。頑丈そうなステンレスの枠組の間にガラス板が嵌められた巨大な水槽だった。左脇にモーターや機械類の入っているらしい鉄製の大きな箱があり、そこから子供の腕ほどの管が二本、水槽の左脇と右脇へ伸びて口を開けている。

部屋の真中に机と椅子があり、他に折り畳み椅子と工用用の脚立が三台ほど壁に立てかけられている。開け放してきたドアの脇にも机があり、それと並んで大きな長方形の木箱が横たえられている。

余分な光が戸口から流れ出してしまったように、俺の目は部屋の明るさに馴染んできた。気持ちも大分落ち着き、白衣の男たちと話をしている佐々教授の方へ注意が向いた。二人とも学生のようなのである。俺だけがセーター

地の底、いや水の底に在る死体には、時間はほとんど無意味なようである。あれから三十分近く経っているはずなのに、同じ姿勢、同じ色、同じ形でうつ伏せになっている。俺は影を舐めるように体を低くして近寄った。水が迫り、裸体が俺と同じ大きさになった。緑の葉を溶かし込んだような水が、透明度を増して明るくなり、裸体も一層裸体らしく見えてくる。

それは顔を底の奥の方に向け、長い髪で素顔が隠されているので救われる。もしこちらを向いていたら、と想像しかけただけで胸苦しくなって動悸が強くなる。とても一人では耐えられないだろう。

右腕は体の蔭になってほとんど見えないが、左腕は自然に伸びて底を這い、白い掌を広げている。その白さだけがひと際目立ち、手袋でもしているように見えるその時、その白い掌の甲に赤いアザがあるのを発見した。けれどもそこまで見るのが限度だった。俺は目を逸らし、屈んで底から一メートルの高さにある水温計の目盛を読んだ。そして机にそっと戻った。決して眠りの邪魔にならないとわかっているのに思わず物音を避けてしまふ。むしろ俺自身の中にある何かを目覚めさせたくないのかもしれない。

机の上のノートに書き入れた。ほとんどの言葉を前の記録から盗んで。『午後七時三十分、KF十二号、変化なし、水温二十度。記録者桐山文人』俺はノートの裏表紙にある『観察者心得』に気付いて読んだ。それには、

『眠らないこと、検体から目を離さず、状態を三十分毎に記入すること。水温に注意。検体が浮上してきたり、変化があった場合には直ちに非常用ブザーを押し、当直者に連絡すること』などと書いてある。紙は黄色味を帯び、汚れがあり、古いものと分かる。

俺は椅子を直し、『心得』通り検体の方を向いた。左の方に頭を置いて、裸体は動かない。まるで一番楽な姿勢でいるとでもいったように頑なだった。

水槽の上にはスポットライトが三つある。何のためかわからないけれど、明るい方が気持ちも幾分晴れるように思い、スイッチを押した。一瞬裸体を盗み見しながら捜す。入口の脇の非常用ブザーの下にそれらしいものがあった。

鮮やかな光線が水を貫き、散乱し、太陽のように裸体を照らした。それは海辺で甲羅干しする背中のように生氣に溢れて横たわっている。裸体の

姿なのに気がつき、セーターを脱ぎ、シャツの上に持ってきた白衣を着た。すると気持ちが楽になった。修士課程の大学院生だと紹介された二人の男は、佐々教授にご苦労さんと労われて部屋から出て行った。入口のドアがぴたりと閉まった。

俺の前に水槽の全体が露わになった。魚影もなくなった。湛えられて緑色がかかった水が、どことなく懐しく郷愁を呼び起こす。それは生物が海から生じたためなのか、それとも自分の産湯を意識下に記憶しているからなのか。

俺はひき寄せられ、二、三步近づいた。と、思いがけないものを発見しておのいた。うつ伏せになった裸体が一体、水槽の底に青白い光をまわって沈んでいた。死人だろうか、動きがない。

俺は信じられず、息を殺し、渾然とみつめた。佐々教授が何か言っているようだが理解できない。目がすべてになり、俺の全身を呑み込んでいる。心臓の鼓動だけがどこかでたうち回っている。

「こんなことだったのか」  
声にならない声を俺は辛うじて吐き出した。

俺が時間を失っていたのは、どれくらいなのだろうか。十分、十五分、それ以上かもしれない。机の上の円いタイマーが、残り時間十数分を示しながらジリジリと音と時間を漏らし続けている。俺はその微かな響きに縛られたように身動きすることも椅子から立ち上がることもできない。けれど、俺の時間を取り戻してくれたのはこの音なのだ。最初に甦った神経が、この虫の歯ぎしりのような音に咬まれて、俺は自分自身を取り戻しかけた。俺は不自然なすわり方をしている。手は椅子の背のパイプをしつかり握り、股は開いてそれを間に挟み、体は伸びきったまま彫刻のように固まっている。目の前に白いペンキ塗りの壁、右手にドアと机、そして長方形の白木の箱。あれは節目の多い粗末な箱だが、棺桶だったのだ。

佐々教授は俺に、観察し、記録してと指示している。再びタイマーが鳴った。俺は悲しい習性通り反射的に立ち上がり、自分の空間を取り戻した。零になったタイマーを取り上げ、印の入った三十分のところにセットして置く。そっと顔を左に向け、水槽の方を見た。「ある、そして、いる」

頭が動いた。気付いた俺は一瞬、目の底を稲妻が走った。そんなことがあろうか。スポットライトが死者を蘇らせたのだろうか。いや、錯覚だ、幻影にちがいない。だが、頭をゆすっている。俺は立ち上がり、忍び足で近寄った。動いている。確かに動いている。黒い髪がゆつくりと揺れている。俺の息が詰まる。詰まった息苦しさの中で思った。隠した顔で空気の管をくわえて呼吸をしていたのだろうか。そんな冗談めいた結末を期待しても見えない。静かに髪が揺らめいているだけだった。そうか、頭ではない。水が動いているのだ、と思い当り、俺は肩から力を抜いた。機械から伸びた管が水を循環させ、水温を一定にしているのだ。気持ちも萎んで少し憂鬱になった。裸体は無関心にこちらに背を向けている。肉の薄い背中、その中心線に小さな瘤を連ねた脊柱が見える。三角形の肩甲骨が折れた翼のように残っている。尻は体の重心に相応しい大きさと広さを持って水槽の中心に沈んでいる。

ベルが鳴った。タイルの床、コンクリートの壁、平らな白い天井、水槽のガラス。すべてが音を増強させ、俺の胸に鋭い矢を集中させてくる。俺はあわてて机に行き、音を消し、次の三十分タイマーを戻した。

幾度かの三十分が俺を刻んだ。俺の半生の典型的な時間を、もつと単純な形で繰り返してみせている。「三十分、三十分」とベルが俺を区切り、時刻の変化だけがノートに記され、他は同じ言葉が並んでいる。俺は決して主役ではなく、この空間と時間の罫に取り込まれているだけなのだ。これが永遠ではなく終わりがあり、一生ではなく数日のことなのがせめてもの救いだった。けれど裸体は、裸体のまま時間を超越している。持続する時間の静止、絶対的な時間の静止、つまり死なのだ。ほとんど死に同化した。だが、死とは観念の中の不愛想な記号のひとつに過ぎず、訪れたことのない地名よりも、もつと実感に乏しい世界のひとつだ。

死が個を襲った絶対的な時間の静止である以上、それ以降時間と無関係になるというのわかる気がする。死にとつて時間は、死者に用意された毎日の日常の時間と同じように無意味なのだろう。ところが俺は、その無意味なはずの裸体の時間を、さも重大なことのようには測らされている。そこには時計で測りうる何か潜んでいるのだろうか。死という時間のずっ

と向うに見えるものは何なのだろうか。それこそが俺自身の死の遠近法なのだろうか。

水温を見に立つ以外にすることがなかった。動きも表情もない死体を前にしていると、自分もそれに似てくるのだろうか。眠っているのでもないのに、ベルの音を聞いて初めて自分の意識に小波が立つ。壁の白さと同じ平板な空白が、俺の意識を支配している。俺は机を離れ、再びライトを点け、裸体の脇に立った。同じうつ伏せの姿なのに、さっきよりも親しみ深く感じられる。この裸体は女にちがいない。ひと目見て俺は確信した。ほっそりした体つきに似合わぬ横に張った丸い尻、痩せていながら滑らかでふっくらした感じの腕や足はどうみても女のものであった。年齢はまったくわからない。二十代にも五十代にも思える。ただ枯れ果てた老婆でないことは確かだった。記録用のノートには、検体KF十二号と名付けられて、年齢も性別も書かれていない。が、もしかしたら「F」は女性を表わしているのかもしれない。俺は水槽の右手にまわり込み、女の足の方から眺めた。尻の割れ目そのまま股の間に下り、ほんの僅か開いている大腿の付け根あたりの黒い繁みの中に消えている。それは女の暗い傷口が光のささぬ奥に仄かに見えるような気がする。髪が揺らめいている。水の循環が再開されたようだ。女はまるで生きているように見える。清楚な恥じらいで体を固くし、顔を隠してくびれた腰をさらすしかない境遇に耐えている。すぐ手の届きそうな近くに、水で薄められた光をほど良く肌にまとった女は、同じライトを浴びて舞台に立つ女優よりも生気に溢れていた。大腿から脛にかけて、白い脚がなだらかな弧をふたつ描きながら細くなっている。それは今にも踊りだしそうに足首に力を入れアキレス腱に横皺を寄せている。俺の好奇心は刺激された。これまでの停滞が嘘のように頭の中で水が流れ出してきた。乳色に澱んでいた意識が透明になる。俺は女の少しの身振りも見逃すまいと凝視し、観察する。女の肌には散らばる虫喰いのような跡にも気が付いた。

と、突然、後方で大きな音がした。振り返った俺に向って、佐々教授が笑っていた。

佐々教授は手にお盆のような板を抱えて入ってきた。

「よう、どうだい？ 変りないかい」

「組織を取って何を研究するんですか？」

「死体の各組織の腐敗、そしてその溶解の経過を、継続的に追って調べているんだ。とくに、今回は水中での変化がテーマなんだ」

佐々教授は実験用の机の引出しから、液体の入った三センチほどのガラス瓶を数個取り出した。灰色のゴム栓がついて封印されている。さらにガーゼにくるんだスチール製の針も見せた。銀色のそれはマッチ棒の二倍の太さがあり、二重針になっていた。外筒は斜めに切り落とされて鋭く尖り、内筒はやや長目で松葉のように二つに割れている。

「まだ準備があるから、それ、ゆっくり食べていいよ」

佐々教授は身軽に立ち上がり、壁から脚立を運んで水槽の前に置いた。さらに機械の奥の壁から二メートル以上ある細いステンレス製の棒を持ってきて、その先端に針をネジ式に廻しながら取り付けた。

「これはシルバーマンの生検用の針を改造したものだ、なかなか取扱いが難しくね。ほら、こんなふうには組織を切り取るんだ。……大学院生にもコンニャクを相手に練習させているが、なかなか上達しなくてね。ここへ連れてくるとみんな意地がなくなるんだ。もつともコンニャクにさえ馬鹿にされているんだから仕方がないがね。……君もちょっと手伝ってくれ……」

佐々教授は一人で笑い声を上げ、そろそろ始めようと瓶を持って下にしゃがんでくれと、俺を促した。俺は、番号のつけられた小瓶を持って脚立の下にもぐった。佐々教授は長いステンレスの棒を注意して持ち上げ、脚立に登った。そして水中にその先を入れた。上半身を水槽の上に乗せ出して女を覗いた。俺の目の前には銀色の棒が生き物のように降りてきた。先端の刃物がちょうど女の尻の上で停まった。

「それじゃ始めるぞ。それッ！」

声と共に棒が震え、光った針先が肉の中へぶすりと突き刺さった。俺は思わず自分の尻を浮かした。だが女は痛いとも言わず、針を体に入れたまま無関心だった。

「今、皮下脂肪の中間まで針が入ったはずなんだ。これから内針を押し込めば脂肪組織とその下の筋肉まで取れる。そこへ外筒を下ろして完了とい

水槽を見、机の上のノートを点検し、妙に懐かしく聞える声で喋った。「うん、この要領でいい。眠くなるだろうが、この調子でがんばってくれ。腹が減っただろう。ほら、夜食を持ってきたよ」

佐々教授はお盆を机の上に置いた。その上には小さなポットと紅茶カップ、色んな形をしたドーナツとリングが一個あった。

俺は腹がすいていた。喉も渴き、何よりも言葉に飢えていることに気が付いた。注いでもらった紅茶を一口啜り、ドーナツにかぶりついた。そしてそれを飲み込んでから、自分でも意外に思うほど滑らかに言葉が出た。初めは驚いて仕事の内容もよく理解できなかったけど、今は落ちついて考えられる。

何を狙ってこんな実験をしているのですか？ あの検体は女のようなのですが、何者ですか？ 死因はなんですか？ このあとどうなるのですか——俺は疑問が消えてしまうのを恐れるかのように、返事を待たずに立て続けに喋った。

「あれは、見ての通りの女だが……」

佐々教授は、予期した質問が出たとばかりに表情を変え、今まで見せたことのない厳しい顔で切り捨てるように言った。

「死因や素性については何も言えないな。さっきまでいた大学院生にも知らされていない。とにかく、死後、研究のために役立てられているということだ」

「年齢はどのくらいですか？」

俺は喰い下った。何でもいい、あの女について知識が欲しかった。こういう巡り合わせになった女について知りたかった。

「それとも言えないな」

逆らうような表情をちよつと見せたが、彼のガードは固かった。それだけ秘密の匂いが強くなった。俺は少し話題を変えた。

「皮膚に小さな傷みたいなのがあるのは、研究と関係があるのですか？」

「ああ、あれか、よく気がついたなあ」

佐々教授の声にほつとした気持ちでしみ出していた。

「組織を取った跡なんだが、これからまたやるから、ちよつと見ていたまうわけだ。生検の場合は素早くやらなければならないが、死体の時はその点気楽だ」

解説すると、佐々教授は操作を終え、「それッ！」という掛け声と共に針を抜いた。そのあとに、マッチの軸にも満たない小さな傷が残った。赤い血が涙のように溢れてくるのではないかと見守ったが、僅かな色も滲まなかった。

佐々教授は棒を水から出し、先を俺の方へ下ろしてよこした。しばらく竿についた水を、涙のように滴らしてから外筒を引き上げた。そして内筒の間に挟まっている女の肉片の一部を見せた。黄色味を帯びたぶよぶよしたものと、薄い肉色をしたものが一本の紐のように針の内側についていた。俺はそれをピンセットで針から取り、用意した小瓶にかろうじて落とした。手が震え瓶の液がこぼれそうになった。

ある夜、またしても列車のごう音により夢うつつから引き戻されると、俺はひどく気持ちが減入ってしまった。体の内側でもう一人の自分が下へ下へと際限なく落ちてゆくふうなのだ。サイドテーブルの腕時計を取りあげてみると、ベッドに入ってからすでに三時間近い。途子は仰向きに顔だけを少し傾けて軽い寝息を立てていた。毛布が鳩尾のあたりまでずれて、その下に盛りあがった白い腹部が呼吸につれてゆっくりと上下している。俺は無邪気ないたずらを仕掛ける気分を味わいながら、そろそろと毛布から足をぬき、ベッドを下りた。すると、一瞬女の寝息が途切れ、体が横向きになった。勢いで毛布が脚から降り、彼女の腹部がむき出しになった。スタンドの灯りに丸く浮き出したその白い腹部に、俺は一瞬強い印象を受けた。

昔、俺に虫集めの楽しさを教えてくれた少女が、バツタの腹を切り裂いて見せてくれた。その時の灰白い花芯のようなものが目に浮び、あの美しく溢れてくるものをもう一度みて見たい思いにかられた。

俺は風呂場へゆき、湯舟の蛇口を開いた。彼女の眠りをさまたげないよう扉をしめると、ほとぼしる湯音と湯気が浴室いっぱい尾を曳いてふくらむ。薄緑色のタイルを敷き詰めた浴室には、たったいま作業が終った

ばかりの解剖室のような、清らかな空虚が湛えられていた。ついまいましがたまで、その辺に飛び散っていた汚物もきれいに洗い流され、ただかすかな腐臭に似た甘い匂いだけが残っている。

壁の向こうで勢いよく排水管を流れる水の音がした。その壁の向こうも風呂場らしい。壁の色も窓も間取りもこの密室とそっくりの部屋が排水管や冷房のダクトにつながれて、このマンションの建物いっぱいには蜂の巣状に重なり並んでいるさまが想像された。

その部屋のひとつひとつにそれぞれのつがいつがひの蛹まぶたがこもっている。そんな図柄を何かの合成写真で見たことがあった。

俺は他人事のように少し笑って、湯舟の中に沈み込んだ。

佐々教授が去り、彼の手でスポットライトが消された部屋には、一瞬のうち地上の夜が重々しくのしかかってきた。俺と傷ついた女はしばらくめいめいの孤独に浸った。俺は毛布を腰に巻き、女は蛍光灯と水をまどつていた。その方が、乱された気持ちこころが落ち着き、新しい傷口が癒えるのにちがいがなかった。

俺は光のように頼りなく、闇のように重そうな女の寝姿に問いかける。

「——生の終焉と同時に、苦痛に震えたあなたの肉体も、野焼きの煙となつて空に昇るはずなのに、何故、あなたはこんなところで安眠を妨げられなければならないのか？」

しかし女は何も言わない。言いたそうな素振りさえ見せない。いや答えられないのだ。一人の人生に結論を与えることになるかもしれない大切な事実さえ、佐々教授に奪われてしまっているのだから。

俺は歩きはじめる。部屋の中を自分の尻尾を追う犬のようにぐるぐると廻る。少しでもこの女の生きていた姿を知ろうと注意を集中させる。

ここは確かに法病理実験教室の地下室だったのだ。ここへ運ばれてくる遺体は、警察から検察の手を通して来る以外にははずだった。と言うことは、殺人、事故死、不審死、自殺、それにほとんどが身元不明の死しかないことになる。つまりこの女は生きて地上にいた時から、すでに今の境遇に似た不幸や不運に付きまといわれていたのだ。翻弄された弱者の生は打

ち身のように、死の闇に呑み込まれたあとも、こうして傷と痛みを自分の上に現さないではいられないだろうか。

俺はうつ伏せの女を仰向けにしようとする妄想のような試みを諦めることにした。女の過去、太陽に照らされていた頃のこの女を捜し出そうとするのは徒勞だった。女は無限に続く死界に顔を向け、決してこちらを振り向くことができないのだから。

深夜二時を過ぎた。俺は疲労困憊し、椅子に小さく貼りついて息をついた。床の冷気が凝縮し、水の上に足を乗せているように爪先が痛くなった。だが空気の方は思ったほど冷たくならなかった。二十度に保たれた水槽が仄かな温もりを反射して、まるで女が俺の介添に感謝して暖めてくれるようだった。

目を瞑る。水槽も白い壁も消え、地下室から脱出できたような気分になる。早く部屋に戻り休息したい。

目を開いてタイマーを見る。まだ二分しか経っていない。ジリジリという音は同じなのに、物差しの目盛をレンズで覗いたように時間が萎えた神経をゆっくるといたぶっている。俺は問延びした時間に悲鳴をあげた。

半日の授業を終えてきたらしい途子は南側の小公園へ足を向けた。低い土手と生垣に囲まれた公園には子供たちやその母親たちが集まっていた。突然、その子供の一人が彼女のところへやって来て舌を出した。

「今の見てた？ ちょっと意地悪いと思わない？」

途子はあたりを窺いながら小声で言った。

いちばん端のベンチには老人が二人、知り合いらしい面持ちで座っている。その隣りのベンチの前で途子は立ち止まった。そして彼女はそのベンチの背もたれに両腕をひろげて、どこか遠いところを眺めているふうだった。もうコートが欲しい季節なのに、依然セーターのままの彼女の若さを、俺は貴重なものと思った。まるい頬や目元のあたりは少女のような柔らかなさを残した彼女の表情が、俺は好きだった。それはどんな年齢のどんな顔にも変わってくれそうな気がした。

「風がなくなつて気持ちがいいわね……。あたし、できたみたい」

「何が？」

「ほら、だから、できたみたい。多分、文人くんの子」

途子は自分の腹を指差し、笑みを浮かべたまま答えると、片腕をベンチの背もたれからはずしてそれが当然のように座る場を空けた。俺はそこへ腰を下ろし、ポケットをまさぐってハンカチを取り出す。俺は額の汗をぬぐった。

「ほんとか？ほんとに？俺の……」

飽きもせず俺はそれを繰り返した。

「ええ、そうよ。どうしようかしら？」

彼女はゆっくりと視線を引き戻し、顔を傾け気味に微笑んだ。

午後の二時過ぎだった。地下室から帰って、一階の仮眠室で七時間近く眠ったことになる。シャワーで清められた体に、いつもとほとんど同じ力が甦ってくるのを感じている。約束の六時半が来れば、とまどいながらも再びあの地下室に降りて行くのを、俺は知っている。疲れ果て逃げるようにここに戻ってきたけれど、すべてから退散したわけではない。あの女がどうなるのか最後まで見届けたいし、あそこにもっと系統立てて考え、整理できそうな気がする。自分自身の過去と未来の時間について、無数にあるのだから。今度の偶然を大切に、目の前に開いた裂け目をもう少し覗きたいし、足を踏み入れてみたい。

けれどおっくうな気持ちがあるのも確かだ。見ないで済めば見ないで、知らないで済めば知らないままでいた方が良かった世界なのかもしれない。そんな思いが心の片隅にあるのを否めない。あそこがどんなところか分かってしまった以上、もう近寄らない方がいいとも思った。美しいもの、心地良いもの、軽やかなものだけを見、味わい、感じていられるのなら、それが一番いいことなのだから。あの空間は、美しさよりも苦痛と秘密の方が勝り、シリアスすぎる気がする。それは以前読んだ本のラドキンという作家の『人間は不幸のなかでこそ美しい』という言葉を思い出させた。

この衰弱のなかで、今、俺はむしろ自ら進んで地底の女のところへ戻ってきた。やり場がなく、行き場所もない自分の感情はどっしりと沈み、そし

夜中、俺は浅い眠りのなかで、遠くに途子の泣き声を聞いたように思った。夢うつつのうちに耳をすませたが泣き声はもう聞こえなかった。夢の中で聞いたのか、それとも彼女の寝言なのか。俺は再び息をこらして聞き耳を立てた。彼女の寝息が聞こえなかった。上体を起こして、となりの彼女を覗いた。

途子は乱れた長い髪を敷いて、わずかに眉をひそめ眠っている。何かに怯えた夢でも見たのだろうか、と俺は再び毛布の下にもぐり込みながら考えた。

白い闇の中に青白く澱む水槽の水、その中に湧いて出たような巨大な熱

帯魚、女の泣き声、それらをつぎつぎと思いつかべた。

俺の腕の中で途子の上げた声が生々しく甦ってきた。二つの声は一つになり叫びつづけた。先ほど耳にしたのは彼女の声ではなかったのか。それからまたしばらく俺はまだろんだ。

その夢うつつの薄明の中で、終始俺は水槽の巨大な熱帯魚の姿を意識しつづけていた。ある瞬間、水槽の熱帯魚と途子の体が重なり、また途子の体がああときの「水槽の女」に重なった。

息苦しくなつて俺は目を覚ました。夢を見ていたのだと思った。それからまたあの女のようにどんな死に方でも死んだことに変わりはないのだ、と自分に言い聞かせるように考えた。

閉まりの悪いカーテンの端から淡い光が洩れている。しかし明け方の光なのか、夜の色なのか俺には見分けがつかない。途子は静かに寝返りをうった。

「もう起きたのか？」

俺は醒めきった声で言った。彼女は薄目を開くとぼんやりした口調で時

問を聞いた。

「もう朝？」

「大丈夫。時間はまだたつぷりある。でも出勤する前にちよつと……」

俺は彼女を毛布にくるみ、抱き寄せて繰り返し頬ずりをした。どうしたわけか手足が氷のように冷たかった。俺は突拍子もなく熱い風呂に入れてみるのがいいかもしれないと思った。

俺は急いで風呂に湯を張り、冷たくこわばった途子の体を運んだ。そうして舟形の浴槽に横たえると、彼女は目をあけたままいつとき浴槽の縁を離れ、ずるずると足から沈んでいった。ふざけているのか彼女は目をあけたままである。湯の中から俺を見つめている。俺の目の下に見える彼女の白い皮膚が青く透けているように見える。まるで水槽の女と同じだった。明るい朝の光の中、間近に迫る彼女の体を俺は眩しい思いで眺めていた。

だが、我に返って俺はあわてて彼女の体をかかえて、一步一步踏みしめるようにベッドに近づいていった。

時が経ち、水槽の女が浄化された水の美しさを教えてくれた。何ひとつ身につけていない女は猥雑さも卑しさも無関係に横たわり、媚びも駆け引きもない率直さで、裸身を惜しげもなく俺の目に与えている。今となっては、俺は落ち着いた素直な気持ちになり、女に感謝と親しみさえ感じている。もしもガラスと水が阻んでいなければ、女の冷たい肩に手をやるのもこわくはない。俺はもう恐怖も孤独も感じず、ほぼ平常心に近い状態で三十分刻みに水温を見、記録するという動作を繰り返しながら、俺は自分の時間やあらゆる人生の底辺にある死の意味について考えようとした。

けれど、記録の残らない白い壁は、考えを積み上げるには向いていないようだった。何もまとまらないうちに大学院生の一人が現れた。もうそんな時間になっていた。夜の更けるのを意識しなかった。自分の考えに熱中し、気もそぞろに時間を書いていったようだった。

その大学院生は背の高い方で、角張った顔に愛想笑いひとつ見せようとしなかった。どこか余裕をなくし緊張しているその陰気な男を見ると、場違いに思えた佐々教授の活発な明るさが、むしろ好ましく思われた。その

すると、この動きがまるで頭の中の水を掻き混ぜたような効果を与え、堰止められていた思考が俺の脳裏を自由に流れ始めた。

水槽の女は、どんなに手荒に扱われても、死界に沈み滅びるのを待っているだけだ。死んだ女に時間はない。過去も未来も曖昧に溶けている。今、朽ちかけた現在という時間を、俺の前にわずかに覗かせているにすぎない。だが、俺は未来を持っている。豊富な時間に恵まれている。これからのとえひどい仕打ちを受けたとしても、それを数え切れないほど繰り返し返さなければならぬ未来を、平等に分け与えられている。たとえ死んだような現在でも、腐った傷口のように臭いを放つ現在でも、必ず太陽と一緒に蘇ってくるのだ。しかも四季のように自ずと移り変ったりせず、肉体が衰えるように朽ちながらますます惨めに繰り返される。未来は、今となってはこの女の拷問台にはかならない。限らない苦痛を与える生地獄そのものなのだ。この女にはもう、この非情な時間の責苦から逃れる方法はないのだろうか。ただあきらめてきつぱりと未来を断つこと、つまり死ぬ以外にこの時間の罠から逃れることができなかつたのだろうか。

だからこそ、俺は未来について考え直す。何気なく見過ごしてきた未来という時間が、今無気味な色を帯びて俺の前に広がり始めた。

油断できない鋭さを持って、まるで人をおどすかのように迫ってくる。ふと俺は思いつく。未来の時間は腐敗し停滞した今日を鋭い切っ先で痛めつけながら、繰り返されると同時に、新しいものを生み出そうと痛みに耐えている。

どのように今日、現在を生きるべきかという問いの答えを浮き上がらせるには、頭上から垂直に降りてくる光を受けてこそ、今何をなすべきかが正確な透視図として浮き彫りになるのだろう。未来の時間を切り捨て、瞬間の快楽だけに支配された今日は、決して生きていないし、朽ちる一方なのだ。

俺は死の燐光を漂わせている女に、感謝の気持ちで一杯だった。この女こそ俺に多くのものを与え、濁った眼を清めてくれたのだ。今、傷つきながら、なお美しさを失わない女の裸身に俺は憧れに近いものを感じる。水槽に頬を寄せて女に近づこうとする。二十度に保たれた水はそれほど冷たくなく、火照った肌からほど良く熱を吸ってくれる。これが女の体温だと

男は「夜食だよ」と素気ない声でポット、リング、ドーナツを差し出した。そして大学院生の男は脚立を出し、逡巡するように女をみつめた。細い目がますます細められ、頬骨の辺りがピクピクと痙攣している。男の表情や目配りが気に入らなかつた。気弱な煮えきらない態度でぐずぐずしているながら、恨むような眼差しを女に投げつけている。

男は何一つ身につけず素直に全身を晒してくれている女を、少しも理解しようとしなない。自分のことしか見えていないのだ。

男は観念したように脚立に登った。そして自信なげに水槽の上に身を乗り出した。銀色の竿が、迷いながら女の尻の上を右に左に動いた。針先が無駄な傷をつけるのではないかと心配になり、俺は座っていられず、女に近寄った。男はどうか右尻の真中に尖端を止めた。思い切り悪く動いた針が、女に喰い込み、ねじられ、引き抜かれた。水面に滴る雫の音が舌打ちのように響いた。

だが、すぐに本物の舌打ちが聞えた。恐れた通り失敗したらしい。男の醜態は目も当てられなかつた。幾度となく逸し、刺し直した。もう女をいじめるのはいい加減にしてほしい。俺の中で、早く女に安眠を与えたい、などと妙な同情心が湧き起こってきた。

女はいつになったら解放され、女に相応しい、美醜を越えた黄泉の国に行けるのだろうか。いつになったらこの女に対する実験が終了するのだろうか。

俺はやつとのこと仕事を終えた男に詰問するように聞いた。

「多分、浮上したら終りになると思うよ。空気に触れたら、もう、使いものにはならないんだ……」

男は自信なげな、か細い声で答えた。

「女が浮上する？　ここから浮き上がるの？」

俺は信じきれず、思わず聞き返した。

男を見送ってすぐに机に戻った。突然ベルの音に立ち上がり、水温を見に行く。傷つけられた女は、同じ姿勢で女の悲哀を凝縮させて動かない。いくら小さな傷だといっても、もう覆い隠しようがないほど目立ち始めた。尻に腰に背に赤黒い跡が付き、すべすべした肌が失われ、醜くなつていく。できればこれ以上痛めつけられるのを見たくない。水槽を離れ、机に向う。

思い、水槽に触れた。しばらく手でその体温の感触を味わった。今夜は昨日に比べれば、季節が違ってくるくらい暖かだった。

突然、女の位置が変わっているように見えた。

「まさか、そんなはずが？」

震える膝を折って水槽に顔を貼り付ける。確かに浮いている。腕が支え棒のように底に着き、垂れ下がった乳房らしいものが蔭になって黒くろに見えている。本当に浮き上がるのか。俺は体を起こし、溜息をつく。急に冷汗が湧き出すのを感じる。だがすぐに、もう一度見たくなる。確かめざるを得ない気持ちになる。こわごわ屈もうとして、連絡をしなければならなかつたことに気付く。

非常用のボタンを押した。一分も経たない内に、ジャージ姿の先程の背の高い大学院生がドアの蔭から上半身を覗かせた。

「何かあったの？」

「ええ、女が、いえ検体が少し浮いたようなんです」

俺はもつれる口で勢い込んで言った。

「そうか、今夜だったのか、ついてねえな」

大学院生の男はぼやき声を上げ、眠そうに眼を擦りながら入って来て、水槽の前にうずくまった。

「本当だ。浮き始めたようだな」  
ぶつぶつ言い、すぐにドアの方へ向った。俺は一人で残されるのかと心配になった。急に女が得体の知れないものに思えてきた。

「あの、これから一人で、見てなくちゃならないんですか？」

「いや、佐々先生に連絡して来てもらうよ、最後の詰めがあるからね」

俺は安堵して頷いた。

「きみ、ちゃんと変化を記録しておいてくれよ」  
男は厳しく言って、ほとくの視線を振り切り外へ消えた。俺は時計を見る。

午前一時十五分だ。十分頃に変化に気づいた。男から教えられたように腰骨の突起の部分で、浮んだ距離を測る。十六センチ浮上している。ノートに記録していると、昨日の緊張が蘇ってくる。俺は単なる番人ではない。佐々教授の助手として働いた自分を思い出す。機械的に時間を記し、自分の物思いにふけていた過ごし方を止めようと思う。

良き脇役に徹するのだ。視線を鋭くし、死体のちよつとした変化も見逃すまいと待ち構える。同じ場所に座っているのに、死体が少し近づいたように感じる。床を離れたせいとか、それ自体が変化したのか。それとも俺の意識が緊張して澄み切っているからなのか。五分経ったが、停止状態のままだった。二十分経ってベルが鳴った。念のため水槽の目盛りを読んでみた。二十センチになっている。動かないように見えて、少しずつ浮いているのだ。

身を引き締め、観察に更に力を入れる。

三十分が過ぎ、水がもっと厚く死体の下に横たわった。重さで少し角度のついた腕も底を離れ、水中に突き出た櫂のように魚の脇ひれのように漂っている。今にも死体が泳ぎ出しかねないと感じ怖くなった。水槽をよじ登り、俺に飛びついてくるのではないか。傷の痛みを訴え、恨みごとを言い、俺の血を欲しがるのではないか。

このとき大きな足音を響かせて、佐々教授が現れた。それは凍えた体を溶かす春の風のように、俺を温めた。

「やあ、ごころうさん、間に合ったな」

彼は息を切らしながら大声で喋った。

「浮き始めて一時間以内なら、大丈夫だから」と独り言を言い、素早く標本採集の準備を始めた。

俺は佐々教授の姿を見た途端、力が抜けるような安堵を感じた。椅子に座り直し、澱んだ息を肺の隅々から追い出した。彼は活発に動き、大学院生の何倍もの早さで準備を完了し、脚立に上がった。

何も言われない内に、俺は下で待機した。針が女の裸体の上に停められ、鋭い声と共に腰の中に突きたてられた。漂っていた体は、今度は上下に揺れた。水面が騒ぎ、波立った。

「針の切れが悪いと、こういう不安定な状態の時は苦勞するよ」

佐々教授は弁解するように、それでも失敗なく女の肉片を俺に渡した。

身悶えしながら肉を箸り取られる女を目の当たりにして、俺の同情心が息を吹き返した。浮上すれば終りだと言われながら、その時を好機だとばかりに餌食にされている。脅えて遠ざけた自分の薄情を俺は後悔した。佐々教授が早く終えたのがせめてもの慰めだった。一度の失敗もなく、プロラ

しく美しく残酷な仕事を済ませた。大学院生が入って来た。パジャマのよななジャージを脱ぎ、白衣に着替えている。外科医のような帽子を被り、首からマスクを掛けている。佐々教授にも帽子とマスク、それにゴム手袋を渡し、準備完了しました、と告げた。佐々教授は頷き、俺の方を向いて言った。

「桐山君、ここは目を開けてよく見ておいた方がいいぞ。何度見ても、変な感じのするところなんだ」

「何が起きるんですか？」

「これまで少しずつ浮んできたのが、あるところまでくると、一気に浮上するんだ」

女はすでに六十センチ近く上に来ていた。ライトに近くなり、肌の明るさ、傷の多さを目立たせ、藍の部分が一層暗くなっている。

うつ伏せの姿勢は同じで、まるで見えない台の上に置かれているように固まっている。けれどよく観察すれば、とても不安定に思われ、ちよつとした衝撃が危い平衡を破綻させかねない予感に満ちていた。

突然、女が身震いした。驚いて立ち上がった俺の前で、女を縛りつけていた重い枷が外れたように、ゆっくりと上昇を始めた。のんびりと少しづつ、しかしこの目ではつきりわかる速さで、上へ上へと動いている。俺は何かを惹かれ、誰かに呼ばれたような気持ちになり、脚立に登った。水面の上から女がやってくるのを迎えた。佐々教授が何か「それはやめとけ」とか言ったようだが、よく聞き取れなかった。

透明な水の中、俺に向って女が迫ってくる。俺を待ちかねたように速さを増し、水を押上げ、背中と尻を空気に晒した。と、その瞬間、腕を空中に上げ、俺の鼻先を切り、体を回転させ仰向けになった。紫色だった。女は顔も胸も脚もすべてべつとりとした紫色に変っていた。妊婦のように膨れた腹も青黒く濡れ、紫色に腐った顔の中で白い歯だけが宝石のように無垢に光っている。首周りも青黒く紫色に変色していた。

「醜い。無惨だ。死だ、死そのものだ」

俺は叫んだ。俺は一目見て目がくらみ、落ちそうになって脚立にしがみついた。押し寄せる吐き気をかろうじて耐えた。

俺は打ちひしがれ、のろのろと脚立から降りた。

「美しいもんじゃないだろう？ だからやめとけと言ったんだ。まもなく死斑で、目も当てられなくなるんだ」

俺を慰めるように佐々教授が言った。俺は何かを答えるべきか、と頭の隅で考えたが、体も頭も遠くの方にあつて自由にならなかつた。大学院生の男が外から、車輪のついたベッドのような台を押し来た。シーツの替りに緑色のゴムが敷いてある。それを水槽の近くに停めた。

「桐山君にも手伝ってもらうぞ」

ゴム手袋を俺に押しつけて佐々教授が言った。三台の脚立が水槽の前に並べられた。俺は命じられるままに右端の脚立に上がり、水面に漂った女の足を持った。変色した股間に女の繁みが重ねた薄い布のように貼りつき、その下に黒い傷口が見えていた。頭の方を佐々教授が持ち、腰の部分を一番体格のいい大学院生の男が受け持った。

弾みをつけ、水音高く水面から持ち上げ、夥しい水滴を落としながら脚立から下ろし、台の上に横たえた。足首の硬く細い感触、脛の筋肉の木のような感触だけが、いつまでも俺の手に残った。

大学院生の男が、台の下から白布と花束を取り出した。その場違いな華やかな花束が、俺の涙を誘った。感情も感慨も何もなく、ただとめどなく流れる涙が俺のすべてになった。

花束を受け取り、女の胸の上に横たえた。百合や菊が変色した女の胸や首を飾った。

白布が女を雪のように覆った。

「解剖するんだが、見学していくか？」

俺は顔を上げ、激しく横に振った。

棺桶を台の下に押し込み、台車と女は出て行った。それを見送る俺に、佐々教授が何かを差し出した。

「どうもごころうさん、お蔭で助かったよ。これが二晩分の日当だ」

俺はあわてて手を後ろに隠した。お金のことなどすっかり忘れていた。「そんなものなど受けとれない。とてもそんな気になれない」

「いいから取りなさい」

佐々教授は無理矢理俺のショルダーバッグに茶封筒を押し込み、階段の脇を通って奥の方へ消えた。

部屋の隅に置かれた水槽がいやでも目に入って来て、俺を困惑させる。水槽の中に漂っているのは水草だけでそれを懐かしそうに眺めているもう一人の自分がいた。あの白銀色の巨大な熱帯魚はきつともう死んだのだ。そんな唐突な考えが頭をかすめた。

今朝早く、俺はその名前の知らない巨大な熱帯魚を外排水溝に流した。途子に見せたかったものとは、空の水槽であった。

昨夜、ベッドの中で高まってくる気持ちを抑えながら、途子は俺の背中に向かって眩いていた。

「あたし、もう母の世話をするのは止めたわ。母はもう一生植物人間みたいになって、ただ呼吸しているだけだから。それにあたしがこのお腹の子の母親になるわけだから……。実はね、あの熱帯魚、十年前にまだ父がいた頃、父が母のために買ってきたものなの。だけど父が突然失踪してからあの魚だけがこの家に残ったのよね。……。もう、いいの。だから、あの魚、あたしの目の前から消してほしい」

彼女の顔と体が俺にすがりついて何かわめいている。

俺はさつきからめまいを感じていた。喉元で言葉にならない黒いかたまりが外へ飛び出たがって、はね回っている。彼女は両の手を俺の背中に当てる。

「あたし、結局は母の死に対して傍観者なのよね」

俺の背中に当てられたそこだけがいつまでも暖かく、なぜかずつしりと重い荷物を持たされたように痺れてくる気がした。

俺は吐き気をこらえながら、あの巨大な魚を両手でぐしゃりとつぶすことを想像していた。すると俺の両手に柔らかいものをつぶしたような感触があつて、ふいに掌が熱く燃えた。

「でも、だからどうだと言うんだろう。いずれ人は死ぬまで、他人の死の傍観者ではないだろうか？ だからあんなだけが特別に非情でもなんでもないのさ」

俺はふわりと生ぐさい臭いに包み込まれた気がした。胸から突上げてくるものを息を止めてこらえた。俺は何気ないふうを装ってベッドから起き

あがり、部屋を出て慌ててトイレに駆け込んだ。吐きはじめると次々と新しい吐き気が背中をのぼって来てとめどがなかった。からっぽの胃がしほりあげられ、苦い黄色の液を何度となく吐いた。

俺はようやく一息ついたところで、洗面所の鏡に自分の青ざめた顔を映して汚れの跡がないかどうか点検した。吐いたため、胸の動悸は激しかったが体は軽かった。俺はもう一度顔を洗い、うがいを繰り返した。

「……理不尽にこの女の体を占領していたものは、あの水槽の巨大な熱帯魚だったのだろうか？」

俺は眉をひそめて呟いた。それは他人の声を聞かされたような気がした。急に洗面所が広がって、自分の姿が目の前から遠のき、ここにはもともと自分など一度もいたことがなかったような寒々しさに襲われた。

部屋に戻ると、途子はベッドの上に座り込んでいた。彼女はじつと俺を見つめている。

「気分が悪くなったの？ さっき、吐きに行ったでしょう？」

途子が心配そうに覗き込んでくる。

「顔色が良くないわ。……あたしの話を聞いたから？」

途子は奇妙な笑いを浮かべて囁いた。

「いや、平気だ。おさまった、もう何ともないさ」

俺は表情を変えずに、彼女が喋り終わるのを待って言った。

「いい子ぶって、無理することないのよ。あたしのこと嫌になったらはっきり言っているのよ。気味が悪いでしょう、あたし。……あたし、自分でも少し変なのかもと思うときあるもの。他の人なら本気で気持ち悪がっていると思うもの」

俺はふと見たこともない彼女の体内に、まだあの魚が棲んでいるような気がした。

途子は自分の手をいかにも重そうにあげて、顔にかかる髪を耳のうしろにはねあげ、それをまたすぐ元に戻した。そして彼女はわけもなく顔をそむけた。俺は彼女の肩を軽く叩き、いつものうっとりした微笑を浮かべて言った。

「気にしないほうがいい。きつと具合がよくなかったからだ」

するとまた途子は俺を見据えている。俺は彼女を見返した。俺は途子と

そう思ったとき、胸の中からどうしようもない苛立ちのようなものが浮き上がってきて、俺は大きく腕を振りかぶった。振りかぶった手の先で、思いきり強くササの枯れ葉を引きちぎろうとした。が、ササの枯れ葉は引きちぎれず、意外に強く、あわてて口もとへ近づけた中指に、血の混じった鋭い痛みだけが残った。

この見知らぬ地方都市に住むようになってからいよいよ、俺は波の上に漂い出て行く。けれども、波だけはたえまなく街の表層に揺れている。それが、俺自身をあっちこっちへと押しやっていく。俺には決まった方向がないので、その時その時に押されるがままになっていた。そうしてどこへともなく漂い出ていく。そういえばこれまでも漂ってきたはずなのだ。

大学の研究室を出て歩き出しても、あの水槽の女が薄れながらついてくる。

目に見えないあの女と馴染合っている。いま、こうして歩いている、あの女の余韻を味わっている。死体だといっても、いつでも再生してくるような気がする。すぐ近くに控えているのがわかる。何度でも呼ぶことができる。いま俺自身を満たしているものはあの女への感謝なのか。俺はなぜか、今、初めて生きていることに感謝している。俺の口からこんなことが出てくるのは奇妙なことだった。

なぜなら、あの女はむき出しで狂暴で貪欲で、俺の心の奥底の何かを破壊することをためらわなかったからだ。きつとあの女は自分をはばむもの一切をはげしく憎んでいたからなのかもしれない。だから、今、俺はなにか暴力に似たものが自分のうちに進行していくのを感じている。

それは止められない。

この夜の都市でも、あれほど無意味なものに見えていた夥しい人の群れも、いまは気にならず、むしろ自分のなから噴き上げた火の余燼を通して見えている。

と同時に、あの女のあのえくぼに似た頬の凹みに、どこか頹廃をふくんだような魅惑のこもった笑いを思い出していた。それはきつとあの女だけが汲み上げる闇の領域のことなのだろう。

俺の前には眩暈のような闇があんぐり口をあけていた。そうしなければ、

十秒以上も見つめ合うことがそう不快でもなかった。だが、先に目をそらすのは決まって俺の方だった。

「あの水槽に何もいなくなると、なぜか淋しいわね。あたし、入ろうかしらね」

途子は笑いながらもうつすらと涙さえ浮かべているので、俺は笑うに笑わず、ぼんやりと空の水槽を見つめていた。

寝静まった夜の底を俺は歩いている。二日前の俺と少しも変わっていないはずなのに、どこかが削り取られたような身軽な気持ちになっている。夜と共に時間さえ疲れ果てて眠りについているのに、俺だけは、俺の時間だけは力に溢れて夜を突き抜けている。生きているからなのだ。今ほど生命を敬い、死を嫌ったことはない。観念と抽象の中にあつた死が、肉体の形を借りて強く俺の全身を打ったのだ。

腐り切るしかない死は、醜悪で非情で、そして悲しい。わかったふうな甘美な夢想を托すべきものではない。水槽の女は腐った末に死の結末へ浮上するほかなかった。だが、生きている俺たちには時間が残されている。たとえ、生きながら死人のように扱われている人たちにも同じように可能性が残されている。

闇と一緒にどこからともなくホルマリンの臭いが風に運ばれてくる。

夜の静寂はこの臭いの響きさえも好ましいものにするのだろうか。強烈に鼻を襲った死臭の名残がようやく薄らいでいく。

ひゅうと俺は口笛を吹いてみる。いや、吹いたつもりは口笛を喉の奥に押し戻しながら、街路灯の光の方へ歩き出してみよう。俺はふと立ち止まる。水槽があの女の墓場なら、俺の墓場はどこなのだろうか、と目をつむる。目を閉じる俺の耳に、女の悲鳴に似た声が聞こえ続けた。

「わたしはいるの？ わたしは本当にここにいるの？ わたしは何て名前？ どんな顔？ 身長は？ 体重は？ ほら、言えないでしょう。わたしはいいのかわ。そうよ、いいのかわ」

俺は目を閉じたまま両手を前に出した。

「結局、俺は何も見えていなかったのだ」

いまいるこの場所からずるとどこまでも落ちていく気がした。

つきまといつて離れないあの水槽の女の影にまず知らぬふりをした。それはとても努力の要ることだった。外にあるものなら目を閉じればすむのに、自分の内にあるのだからどうしようもない。けれど、俺は知らぬふりを続けた。そうして水をかきわけて泳いでいくように、あの水槽の女の影をかきわけてどこまでも泳いでいくことにした。俺はまだ見ぬ青空をひたすら思っている。

俺はヘトヘトに疲れていた。

そうだ、俺は未だ解き放たれていない。酒などいくら飲んでも不安は去らない。

俺はさらにウイスキーを飲み続けていた。酔いが深まって、その晩は珍しく饒舌になった。言葉が次から次へと口から出てくるのが、我ながら不思議だった。

半袖の途子が両腕をベッドの上に無造作に伸ばしていた。その剥き出しの肌を指の腹で撫でながら、「この皮膚はなせきみのものなんだ」、などと呟いていた記憶もかすかにある。

すっかり酩酊して足元が覚束なくなり、彼女に支えられながらベッドに倒れ込んだ。ベッドの脇に立った彼女が何かを口にしようとしたが、それが声になって口から出る寸前に思いとどまったようだ。

彼女は喋っていないかった。しかし唇が動いている。俺は彼女の唇が好きだった。かつて、それは心をそられる肉感的な趣をもっていた。今は少しもそういう感じはしない。笑い声を聞くと同時に、厚ぼったい唇が俺の唇の上にそっと置かれたのを感じた。

その夜以来、俺は彼女の唇をじつと眺めている。

俺が信じてきたのは、というよりそれを信じることで生への意欲をかき立てられていたのは、一年前の、水槽の女との「何か」得体の知れない死という観念だった。

あれから、今、俺はどこに到達したというのか。嘲笑するとすればあの女ではなく、俺自身でなければならぬ。そして俺はこの嘲笑が、あのと き知った内面の空虚への自覚に発していることを知っている。俺の胸の底



にはぼっかりと大きな穴がうがたれていた。  
俺は眼を閉じたまま、両手を前に出した。眼を閉じる俺の耳に水槽の女の声が聞こえた。

「——わたしはいるの？ 本当にここにいるの？」

そして、あのとき「もはや、自分は人間でなくなりました」と言ったような気がした。この現世の時間からはみ出したところで、俺だけがあの声を聞いたのだろうか。

——あの女と俺だけが知っていて、世間の奴らは誰も知らないことってあるものだな。それは俺の秘密なんだ。この秘密を共有しているかぎり、俺とあの女はこちら側と向こう側でいつまでも一緒に生きつづけるだろう。夜中、俺は樹木がざわめいているような物音で目を覚ました。昨日まで続いた雨は夜のうちに止んだのかもしれない。外はすべての物が動きを止めたようにしんとしていた。布団の温もりを抱えこむようにして寝返りを打ち、顔を天井に向けて目を開くと、まるで目までが、闇に溶けてしまったかのように、部屋の中はまだ完全な暗闇だった。隣のベッドでは途子が静かな寝息を立てていた。

部屋の外も内も空気の流れが死んだように止まっている。ただ剃刀の刃のような乾いた冷たさだけが布団から出ている俺の頬にあてられていた。

晩秋の太陽はまだ向かい側の山のはるか裏側にあるらしかった。

俺がまだ二十二歳だったあの秋の日から今日で、丁度一年が過ぎたのだった。あの日以来、俺は水槽の女につきまとわれている。ただ剃刀の刃

隣のベッドで寝返りを打った途子の無機質な笑顔が薄闇の中に沈んだ。やはり疲れている。眠気に襲われながら、俺はその薄闇の中に、水槽の女を感じていた。

俺は眠りに陥る瞬間を待つ。しかし激しい喉の渇きに、現実との関係を深めていく不安が立ち昇ってきた。これからの途子との時間に向かつて、俺は新しい何かを探し出す事は不可能と思うと、全身に絶望の思いが流れていく。

だが、何ごとかを告知するように数時間続いた物音は、いかなる余韻も残すことなく隣の部屋から消え、後にはただ脱け殻のような俺だけが残った。それでもあと数ヶ月すれば、この部屋の上にも春は昇ってくるにち

がいなかった。  
一年後によくやく訪れた静穏の中で、俺は長い病から癒えた者のように、春を迎えることに意思を向けた。

そして明け方、俺は隣のベッドの途子に寄り添う。彼女は相変わらず静かな寝息を立てていた。俺は息をつまらせながら、彼女の白い体を愛おしむように両方の掌で柔らかい胸を押さえた。パジャマの隙間から指を差し入れると、暖かい乳房の揺らめきが指先を溶かした。そして掌を体の下の方へ導き、なだらかなおなかの上を滑らせ、下穿をくぐらせたとき俺はそこに何か動いているものを感じた。

——赤ん坊なのか？ これが昨夜彼女が言った赤ん坊なのか？

俺は思わず飛び上がりそうになりながらそう思った。

——あなたの子供の母になるわ。

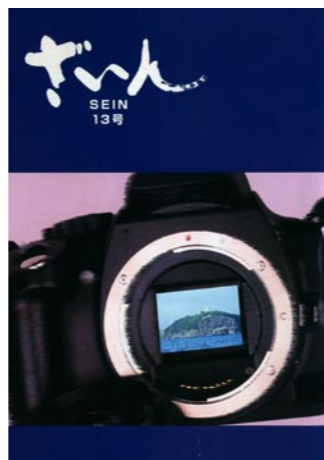
昨夜、二十七歳になった途子が祈りのように、両手を新しい丸い命の上に組み合わせた意味がやっと分かった。

彼女とは未だ籍を入れていない。

彼女の子宮の奥に姿を整えはじめた新しい命が、暗闇の中で小さな光を放つ生き物のように静かに息づいている。胎児の姿を整えるまでに、結局彼女と俺は一年間という時間を必要としたのだった。そしてそれが彼女の柔らかい肉をついで生まれ出るまでには、まだ、長い歳月がかかるかもしれない。

だが、彼女はすでにしっかりとした母親の表情で、これからの歳月を生きていく覚悟を固めていた。俺は窓の隙間から射し込んでくる曙光の中で、彼女の名前を呼んでいた。

〔冬の透視図〕改題



こしばきこう

1949年、札幌市生まれ  
実験演劇集団「風触異人街」主宰・  
演出家。国学院短大非常勤講師  
2004年に利賀演出家コンクール（富  
山県）優秀演出家賞、08年にギョ  
フォワシイ演劇コンクール（東京）  
審査員特別賞を受賞  
戯曲、小説、評論も多数

## 小説集 繭の中 絶賛発売中！

●ご注文は  
アジア文化社へ

まほろば賞特別賞に輝く「繭の中」をはじめ、銀華文学賞優秀賞「爪痕」、「ガラス」、文芸思潮エッセイ賞奨励賞「夜桜」を収録。珠玉の傑作短編集 一四〇〇円



### 第3回まほろば賞特別賞受賞

この小説の深い刻印は、低い位置からの生きる力を感じさせると同時に、命へ向けるいとおしみの神々しさをも放っている。それは病と運命と闘い続け、それを克服した者の光輝でもある。文学としての強い生命力を持ち、永く世に残る作品と信じる。

アジア文化社

「文芸思潮」五十嵐勉